

スルメイカ

スルメイカは、日本各地で最も馴染みの深いイカで、古くから釣りによって漁獲されてきた。身がしっかりした夏がおいしい。刺身はもちろん、鉄砲焼き、イカご飯、酢のもの、塩辛、干しスルメ、そのほか、シーフードサラダ、中華風あんかけ、和・洋・中、なんでもいけるが、富山ならではの料理といえば、何といても黒づくり。イカの墨をたっぷり混ぜた真っ黒の塩辛である。これを食べれば、あなたもお歯黒の美人になれること間違いなし。黒づくりに対して、普通の塩辛を赤づくりという。もちろん、これも捨てがたい。

日本近海のスルメイカは、生まれた時期により、夏生まれ群、秋生まれ群および冬生まれ群の3つの系群に分けられる。いずれの群も、主に日本海西部から東シナ海にかけての海域で発生し、索餌さくじ回遊のために日本海または太平洋沿岸を北上し、やがて南下する。従って、回遊経路に当たる各海域で漁場が形成される。

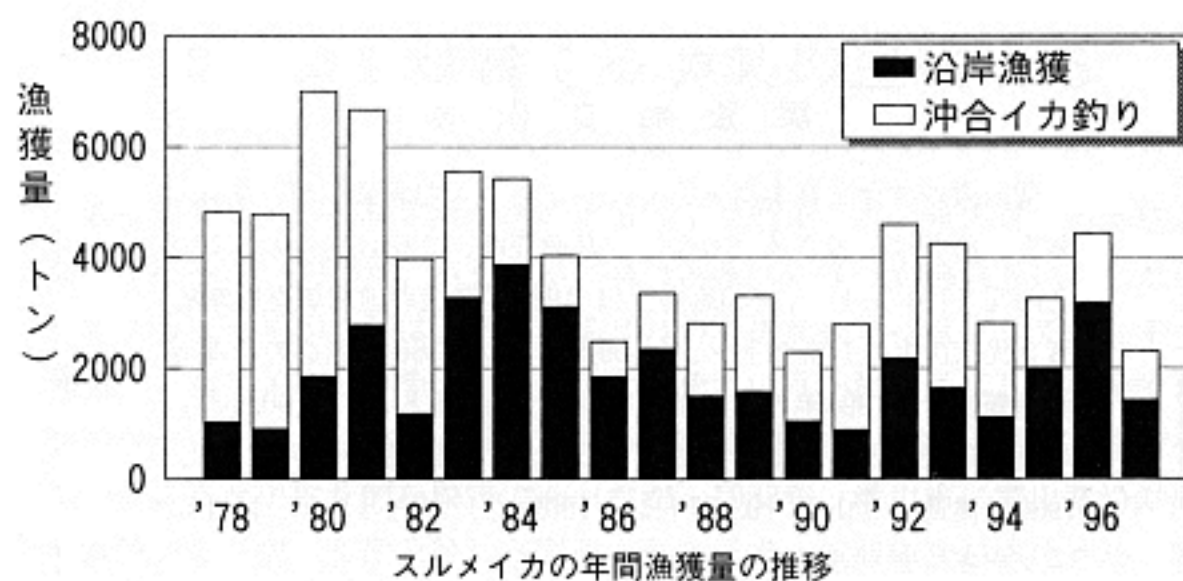
夏生まれ群は、資源量が小さく、ローカル性の高い系群といわれている。秋生まれ群は、資源としては近年最も大きい系群であり、日本海の全域を広範囲に回遊し、沿岸から沖合に至る海域で漁獲の対象となっている。また、冬生まれ群は、太平洋と日本海に分布し、1970年頃までは最も資源量の多い系群であったが、その後、太平洋側の群は減少し、1975年以降、イカ釣りの主漁場がなくなった。しかし、1989年頃から回復の兆しが見え始め、1993年からは、青森県から北海道にかけての太平洋側の海域に漁場が形成されるようになってきている。

このように、わが国周辺における最近のスルメイカの主要な漁場は、日本海全域と青森県から北海道にかけての太平洋側の海域である。現在、イカ釣り船は、沖合を移動しながら、各地で形成されるスルメイカ漁場を追いかけて操業する。このような操業形態は、比較的新しく、1955年以降である。それまでは、秋生まれ群や冬生まれ群のうち、日本海の沖合を回遊するスルメイカは漁獲対象となっておらず、回遊経路や生態についての知見が少ないこともあって、漁業者にとって未開発の資源であった。この日本海沖合回遊群(秋生まれ群)などの漁場開発には、富山県の漁業者と水産試験場が大きく関わってきた。



近年は、漁船や漁具が発達し、沖合の新漁場が開発され、イカ釣り漁業の操業形態は大きく変わった。以前、イカ釣りと言えば、手釣り漁具でスルメイカを漁獲していた。今やコンピューター内蔵型のイカ釣り機が導入され、多種多様な操作パターンを記憶させることが可能となり、海況や漁獲状況にあわせた操作が簡単にできるようになった。これに伴い、船主(漁労長)の役割も大きく変わった。スルメイカの資源の状態や海況は、分布と移動に大きな影響を及ぼす。そこで、いかに情報を入手し、いかに有望な漁場を探索し、無駄のない操業を行うか。漁獲したスルメイカを、いかに値段の高い市場に水揚げするか、また、燃料などの経費をいかに節減するか。直接の漁労行為でない、経営的な部分の「いか(イカ)に」が、勝負どころとなってきている。

スルメイカは、従来、沿岸に回遊する時期を待ち、決まった時期に決まった場所で釣るものであるといった固定観念があった。しかし、富山県のイカ釣り漁業者は、これにとらわれず、大和堆(やまとたい)を主とした沖合漁場が有望であるという情報をいち早く取り入れ、かつ、漁船には当時の最新式の機器を導入した。また、漁具や機械の開発・改良に際しても、率先して製作メーカーと協力し、最新式の技術を導入し続けた。富山県のイカ釣り船団が、全国でも屈指の水揚げを誇る船団となった背景には、このような進取気鋭の精神があったのである。



富山湾では、スルメイカは12月から3月にかけて獲れる。冴(さ)え渡る冬の夜空に沖の方を眺めると、遠くにまぶしいイカ釣り船の灯(あかり)を認めることができる。冬の風物詩といってもいい。湾内では、一本釣りのほか、定置網や八艘張網などでも漁獲される。この時期に来遊するスルメイカには大小2群があり、12月から2月半ばまでは大型(外套背長(がいとうはいちょう)25センチ前後)の成熟群、3月上旬以降は小型(16センチ前後)の未成熟群で、前者は冬生まれ群、後者は夏生まれ群に相当すると考えられている。先に来遊する大型の成熟群は、秋に北海道南部海域から南下してきた群と考えられる。水産試験場では、スルメイカの来遊経路の富山湾直前、すなわち、能登(のと)半島北部沖、佐渡島北部沖およびその中間(新潟県名立(なだち)沖)でスルメイカを捕獲して標識放流したことがある。その結果、いずれの地点で放流したイカも、湾内に入り込むものと遠く能登以西に移動するものがあることがわかった。両者とも、放流2~3か月後まで追跡されているが、片や近海の袋小路である富山湾に滞留し、片や隠岐(おぎ)、対馬、壱岐(いぎ)などまで「足を運ぶ」。近年、富山湾内に入り込んだイカについても、標識放流を試みているが、これまでのところ、湾外へ出ていって再捕された個体はない。富山県のスルメイカ漁獲量の推移をみると、近年、沿岸(湾内)漁獲量が沖合漁獲量を上回ることが多くなっている。(岡本)